

廣く全國に求めて精品を網羅せんむとつこめてゐる上、其の遺物を印畫するに際して、従來行はれた單に形の寫眞だけに満足せず、拓影に依つて全文様の展開圖を併せ載せたのは文様集としての名に副ふものであり、印刷また鮮明、考古學者にもまた藝術家にも役立つ處が多い。解説は東京帝室博物館の後藤守一氏の執筆に係るに云ひ、また要を得たものであるが、其の文様の性質に關して氏特自の意見が可なり多く附け加へられてゐるのは此の圖集の性質なごからして如何なものであらうか。(東京工藝美術研究會、價一輯一・五〇)

●筑紫野民譚集

及川 儀右衛門著

郷土研究社發行の爐邊叢書の一編であつて、著者及川氏が同地に於ける二年の生活中、主として浮羽、三井、三瀧等の地で採集した、河童の話、怪火の話、長者の話、神事及歌舞の話、山の神祕、水の奇傳の話、怪異の話の六類に分けた民譚四十六種を載せ、所々に忠實な注釋を附した菊判半裁百八十頁の冊子であつて、讀んで面白く、民俗の研究者はもとより、一般の讀者にも向く好著である。(郷土研究社、價土・九〇)〔以上梅原〕

彙報

●慶州路東里二古墳の發掘調査

今年の五月から六月に亘つて朝鮮總督府古蹟調査課の事業の一として慶州路東里の二基の古墳の發掘調査が行はれた。それは墳壘が民家の間に介在して著しく封土を削り取られぼ、中心に達する様に見えたので、破壊に先立ち學術的に調査しようとの齋藤總督の主意に基いたのであつて、當時滯鮮中の梅原京都大學囑託が囑を受けて澤、小泉、諸鹿氏等と協力事に當り、二基共に原形を遺存した主要部に掘り當て、多數の副葬品を發見し、殊に西古墳にては前年偶然見出された金冠塚のそれに匹敵する貴重な裝身具類を獲て考古學上稀に見る業績を收めたことは特筆に値する。今ま其の概要を紹介するに、發掘調査した二基の古墳は共に慶州の入口に聳ゆる鳳凰臺の南に近く存するもので、圓形であるが既に土饅頭の半以上を失ひ、且つ大ききまで大きなものではなかつた

が、区内から皇南里に亘る古墳に通有な積石塚の形式に屬し、二基共に現地表面下に積石があり、棺の基底の深さは一は十尺を超えた。豊富な副葬品を出した西古墳は鳳臺南麓を去る正南七十二尺の處にあつて、封土の遺存するもの高さ僅かに八九尺であつたが、其の地下に築成せられた積石部は長徑四十尺に近く、中央に東西十六尺、南北十一尺五寸の長方形の木槨を營み、槨の中央に東西に長い棺を置いて、内に東枕伸展葬の遺骸を葬つたことは、木槨槨の腐朽したものにも不拘、遺骸に附した裝身具の状態からそれを確め得た。即ち槨の中央の東邊に純金製の寶冠が粲然たる金色の儘に遺存し、冠の附近兩耳の邊に三對の同じ質の耳飾があり、其の一は良質硬玉の金帽の勾玉を垂下し、また他の一には金鈴を附したものの、胸部の玉飾は其部分からはじまつて、金銀二種の飾玉に瑠璃玉を加へ四條に漚ねて先端に翡翠丁字形の勾玉を附けたものを佩し、背後にはまた別に水晶の勾玉ミ丸玉、算盤玉の一連、同じ勾玉のミ切子玉ミを連ねた玉飾がもこ懸けられたまゝの原形を保つて見出された。金

飾は二十三個の金製鏝を以て飾つた豪奢な作りで、それが衣類を繞つて腰部の周りに存し、蛟具を通じた革先金具を前に垂れ、此の下方腰の左邊には十二條から成る腰佩類ミ共に小さい璧頭の太刀があつた。腰佩の半ばは短冊形の繫物を垂下して金製舟坏形であるが、他の二個は細長い一種植物質の管狀棘に金銀の細い蛇腹を加へ、上下に金製の飾りを添へて恰も參謀將校の肩章の様な形をした珍らしいもの、また餘の三個は勾玉で、何れも頭部に金帽を加へ、帽には瑠璃、寶石の類を嵌入してあり、其の一個は二個の勾玉を背合せに縛つて上邊に穿孔、針金を以て結びつけた特殊な式である。而して是等は何れも銀の兵庫鎖で以て垂下してあつた。左腰の邊の佩金具に對して右の腰の部分からは精巧な小金鈴二個ミ、心葉形の飾金具二對ミが出て來た。轉じて兩腕を檢するに、左右共に手首に近く外周縁に小瑠璃四十餘粒をちりばめた二双の金釧ミ銀釧ミを存し、それに添ふて一連の瑠璃玉の飾りがあり、左の腕には更に側に置くに珊瑚はじめ青、黄、綠等の小瑠璃玉に勾玉一個を連ねた玉

飾を以てしてゐるのが注意を惹いたし、指の部分からは金三、銀二の指環が出て来て、何れも可愛い小形のもの、それが各指に嵌めた原形をミマめてゐた。なほ足の部分にも左右共に飾玉一連つゝあつた。以上直接に身體に附けた位置に見出された裝身具の外に寶冠の左右には各太環の耳飾一對と玉飾一連宛が添へてあり、又冠の右下の部分に勾玉、管玉、切子玉、平玉、其他の各種の玉類が密集して存した事を前に記した裝身具と共に被葬者の纏つた衣類が腐朽し乍ら一部分を遺存して、綾絹を以て作り、其の或物に金箔を綴じ付け飾りの小金具を垂下したものがあり、更に上部を覆ふに表面に斜格子紋の金銅箔飾りのある革布を以てしたこも、棺の飾りに白雲母片を用ひたこもなきが確められた。是等はよく埋葬當時の璨然たる状態を想像せしめるものである。

自餘の副葬品は棺外の四周に散在したが、其の大部分の櫛の東部にあつて、この部分からは各種の容器、裝身具、馬具、武器の類が累々相重なつて存し無量千點を數へる程であつた。而してもミ棚の様な工合になつた處

に置かれた如く、下段に陶器、金銅器漆器、鐵壺等の各種の容器があり、その上に馬具や武器、裝身具の或物が一定の層序を保つて存した。是等の多くの遺品中に當代の服飾を徴すべき騎馬の人物、船を漕ぐ人物を現はした珍らしい陶器や、徑三寸五分の玻璃椀のあつたこもは、漆器の中に高句麗古墳の壁畫のそれに髣髴たる蓮華紋や、我が法隆寺の玉虫厨子の密陀繪と同巧のもの、あつた點、さては木製の小刀に金製の拵を附した特殊の飾刀の存したこもなきが特に注意を惹く二三の例として擧ぐ可きものである。なほこの外櫛の西部その他から四對の金の耳飾が出たこも興味を惹いた。

東古墳の方は前者の東方約八十尺に中心がある圓墳であつて、外形はこの方が寧ろ大きく、従つてもミ兩古墳は相接してゐたものが見える。内部の構造前者と同式の積石塚で、この方は基底部がやゝ淺く、地表面下九尺餘にして棺の底部を見出した。外櫛の大きさは竪十七尺五寸、幅十一尺あつて、東西線より北に少しく傾いた方向に主軸を置き、棺はその中央に存し、遺骸はやはり頭部

を東にした仲展葬であつた。裝身具の大部分が銀製品のもので、爲に錆化し去つて形をこぼむるもの少ない憾はあるが、それでも、兩耳の邊には長短二對の金製の耳飾を垂れ、首から胸へは瑠璃の大形丸玉を二條連ね、先に勾玉一個を結んで玉飾を佩し、頸部に別に瑪瑙の勾玉一個あり、手には銀製の釧、腰には同じ質料から成る 帶を附け、この帶から各種の腰佩を垂下してゐて、中に小玉で繫けた長さ二寸三分の大勾玉が注意に上つた。而して前者に比べて特色をなす點は兩足の部分に立派な動物紋の透彫のある金銅沓のあつたこと、兩側に金拵の双鳳形の環頭太刀をはじめ銀拵の三環柄頭太刀其他三口の太刀の置かれてゐたことであらう。他の副葬品は本古墳にあつては積石外から二三武器の類が發見せられ、また積石中にも若干の遺品を見たが、其の主要部は櫛の東半にあつて、存在の状態西古墳と全く異なる處なく、櫛底に近く二個の大きい鐵釜をはじめ、各種の陶質の容器、銅器、漆器の類があり、上に馬具類、武器に裝身具の一部が相重なつて存した。中で前者に比して一層精巧な感あ

る漆繪や、二個の鏃斗をはじめ毛彫のある銅器類、龍の透彫紋のある金銅製の轡、鞍、杏葉等は研究上の興味多きものである。なほ此の塚では基底部の調査が充分行はれて、櫛は本來地下を深く穿つて直下擴をなし、底面を固める爲に割石敷きを行ひ、砂利を加へ、棺櫛を置き、然る後四周及び上部に積石を施し、表面を包むに粘土を以てした構造を究むることか出來た。

以上は這般の調査の一斑であるが、遺物の示す處金冠塚のそれに酷似して而も特色があり、彼を併せて眞に二大發見と云ふ可く特にそれが細心の注意を以て發掘調査せられたものであるから、將來その調査報告の公刊せらるゝに至るならば學術上に裨益する事甚だ大なるものがある。如上の遺物に依つて見るに、塚の營造の年代は西暦六世紀の頃に當るべく、被葬者の西古墳は年少の男若しくは女で、東古墳は武人であつたこと考へられる様であり、貴重品の多い點から王族の奥城であらうと説かれてゐる。

聞く處に依れば去る八月上旬、この古墳の南方約一町

の民家の内にある同じ古塚を土人が盜掘を企てたこと官憲の知る處となりて、總督府から藤田鑑査官に小泉囑託ミが出張、發掘を續行、右に擧げた東古墳に相似た副葬品を採掘して廿六日作業を終つたこと云ふ。これまた併せて報告せらるべき性質のものであらう。

● 史學 研究會

例會 六月十四日午後一時半より文學部第三教室に於いて開催、左の兩君の講演あつて午後五時閉會。

證如上人の天文日記につきて 橋川 正君

證如上人は本願寺の第十世なるが、その自筆の日記二十冊の原本は本派本願寺に現藏してゐる。この日記は戰國時代研究の資料として、種々の點より興味を牽くものなるが就中大坂御坊の中心とする六町の市街は城郭寺院都市としてのみならず、大阪市發展の沿革史上より見るも注意すべきものである。よりてその都市の制度、年中行事等の知らるゝ限りについて述べむとて、一々本文を擧げて解説し、終に同時代の實從の筆に成る私心記と比較對照を要する點を指摘した。

支那の記録より見たる長崎貿易に就いて

文學博士 矢野 仁一君

初めに、これ迄の長崎に於ける支那貿易の歴史と云ふものはそれがさう云ふ方法で行はれたこと云ふ手續きの變遷の歴史である様な觀を免れない、而かも其の手續きすらも充分に分らない様であるこれはさうしても支那の記録を藉らなければならぬ。之を藉らなければ其の真相も分からねば、手續きの變遷も充分に闡明されない。從來支那の記録の利用が充分でなかつたのは遺憾であること述べ、それより皇朝文獻通考錢幣所を始め、禮部志稿、續文獻通考、續皇朝文獻通考、大清會典事例、十一朝聖訓、東華錄、續雲南通志橋、雍正殊批諭旨、林文忠公政書、上海縣志、小方壺齋輿地叢鈔、黃逸憲日本國志、孫士希日本述略等よりこれ程長崎唐貿易の真相が説明が出来ること云ふことを詳細に説明せられ支那の銅市場に於て雲南銅と日本銅の消長を爲して居ること長崎に於ける銅貿易の如何に利益があつたこと云ふこと官商額商の別があり、錢氏范氏等は即ち官商で十二氏は即ち額商であること

こ信牌は無償で此等の官商額商に渡つたものでない事。福建、廣東なきの各港より直接に長崎に往來する船舶は銅貿易を禁ぜられて居たこゝ各省の辨銅船は江海關(上海) 浙海關(寧波)を出入したこゝ等に就いて二時間に互て論述せられた。

●讀 史 會

例會 六月廿七日午後五時より學生集會場にて開催、三浦教授西田助教授中村講師天沼工學部教授魚澄、富森學士牧野、井川、橋川、森下、小木其他學生二十餘名出席左記講演ありて後最近學位を得られたる西田助教授の爲め觀意を表す可く晚餐會を開き十時散會す講演の主要左の如し。

歴史に於ける進歩の思想 文學博士 西田直二郎君

客觀的事實を捉ふるを以て歴史の本質となせる時代は去りて今や史學の傾向は事實以外に何物かを求めんとしつゝあり即ち觀念論的歴史の時代となれり歴史に於ける進歩の思想も此の結果にして置に事實の記述を本質となす歴史にては此の觀念を認むる事能はず此の傾向は何事に

も長足の進歩を爲したる近代社會の齎せしものにして佛蘭西大革命前の進歩思想に起りテュルギー、コンドルセ一等に胚胎す此の意味に於て歴史も亦時代の產物也絕對に無色透明なる歴史は在り得べからず瑞西の史家ギラードは近世獨逸の政治上の事件を以て主として史家の鼓吹の責任に歸すべきものとする普通説に反對して寧ろ史家が時代の色彩を帶べるものなりと言へりヘーゲル、ランケの出現は之を裏書するものと言ふを得、要するに歴史の考へ方と時代とは相互關係あり社會の進歩は史學の世界に進歩の觀念を發生せしめたるなり、之を國史に見るに古くは進歩の觀念を認むる能はず記紀には人類が原始時代にミゼラブルなる状態にありしこゝの説話を有せざる也三代實錄の序文は六國史中上出來のものなるも尙善惡の甄して勸懲に備へ人主の聖鑑に供するを以て趣旨とするのみ、要するに日本民族の史的經驗の狹隘を儒佛兩教の影響とは日本の史家に進歩の觀念を發生するの機を與へざりし也榮華物語、盛衰記等の私史には此の觀念の形跡を認め得るが如しと雖も是等は佛教の輪廻思想に支

配せられしものにして新史觀の域に入るべきに非ず只古今を通じて異彩を放てるは新井白石にして從來の盛衰觀を脱して進歩の觀念を以てせる史觀を構成せんことを我國史學史上有意義のもの也史學の此の經過は泰西に於ても畧同一なるが彼に在りては啓蒙運動佛蘭西大革命ありて此の觀念は大躍進を見たるも我には此の經驗なく此の躍進無かりし也而して最近は亦西洋文明の衰頽時期の到來を豫想し希臘式史學の再び擡頭せんことを傾向を認むるも日本にては未だ之を見るに至らず是も亦日本の歴史の上より説明するを得る時代の影響なり云々

大日本史の編纂に就て 文學博士 三浦周行君
余は去四月の初水戸彰考館を見學せるが、同館は今水戸市常盤公園内に練瓦造の新式文庫として存せられ元祿より天保に至る迄の大日本史の稿本をも藏し之に據りて同書の編纂方針、記述の變遷等の一斑を見るを得べし編纂に關する事情は藤田幽谷の修史始末に詳しきも其根本資料たる當時の關係書類往復文書等は多く散佚して今は僅に其の一部を存するに過ぎず、然れども其中には義公の

意見を筆記せる御意覺書文化六年住復書等ありて有益のもの也是等を見て注意を惹きたるは先づ當時にあつては多大の困難と煩累を冒して史料を公武官民の各方面より蒐集せしこと也新井白石荷田春滿も間接にこれに關係し記事の出典を注記することは塙檢校に依れり、次には編纂委員の待遇方法に意を用ひられしこと也時々藩主の響應あり下級の筆生の史論意見も雖も尊重せられ又彼等を教育する機關も備はれり編纂方針、文章の體裁等に就ても多年の間種々の議論もあり改竄變遷もありて其の中には義公の見識をも窺ひ得る也、徳川氏の初め學問獎勵の結果修史事業等起りしが從來の客觀的記述を主とするに止らず風教の爲めに褒貶の意を含めしは大日本史の特質として有名なるが尙正確なる史料を蒐集するに努力せし事は史學の大進歩なり然れども編纂者は何れも朱子學派の人なれば呂武后の例に依りて女帝に反感を示す等其史論は必らずしも純粹なる日本國民の理想感情を描きしものにあらずして猶ほ支那式史學思想の羈絆を脱せざるものあるを免れず之より開放せられしは明治以來

の事也此點より見ても明治大正の史學は日本史學史上一新時期を劃するものと謂はざるべからず云々。

● 歐 米 史 界

アメリカ史學協會大會 事は舊聞に属すれども未だ我學界に報道せられたるものを見ざればこれを紹介せんに昨年十二月二十七、八、九、三日に亘つてアメリカ史學協會は第三十八回の大會をコロンプスに開いたが稀有の盛況を呈し、部會の數議題の數、研究發表の數、孰れも多きに過ぎ當事者をし 少なからず困惑せしめた。法制史の部會は初、ニウヘブンで開かれた後、コロンプスで續行された。近時外交史に對する一般の興味が増進したからで慣例上同部會はタオから開かれたが多數の聴衆を築きつけ得たのは其の反映であらう。モンロー主義宣言の百年記念會も該政策が齎した歴史上結果の討究を任する部會が擧げられた。其他種々の部會の會合を見たと上にミシシッピ流域史學會、アメリカ政治學會、社會研究學會等も同時に同市で開かれ之等相互の間に聯合會が開かれて一層殷賑を加へた。

この大會を通じて最注目すべき講演はベンシルバニア大學教授にして本協會の會長たる、Ed. P. Cheyney 氏の Law in History であらう。氏は歴史上幾多の例證を擧げて

1. Law of continuity 2. Law of impermanence of nations 3. Law of unity of the race, Law of interdependence among all its members. 4. Law of democracy. 5. Law of freedom. 6. Law of progress. 6 六法則を説明して居るが其の全文は Amer. Histor. Review. vol. XXXIX. No. 2. に載つて居る。

實際問題としては學校教育に於ける歴史の地位が重要視され、第一日の午後の總會はこの問題に宛てられた。現世紀に於ける教育上の論争は十七世紀に於ける神學上のそれと同様であるが、教育には聖書に比すべき典據がない。従つて Cheyney 氏の指摘した通り、歴史の教授法に於ては方針が尙不足であり、不完全を免れぬ。殊に一九一六の國民教育會の報告が他の社會科學を重視し之を以て歴史學科に換へんとしてゐるから歴史教授の方針は愈々動搖する。そこで Cheyney 氏は史學と他の社會科學との無關心、孤立、或は嫉視、競争を遺憾とし兩者の協

力協調を説いて居るがこの問題に關する委員會は其協調協力に對する方法努力を力説した。

尙アイオア大學の Miss B. L. Pierce 女史は近年歴史教科書に反英國の宣傳及戰爭熱の傾向あるを指摘し、前者は Ch. G. Miller 氏がハースト系の新聞で唱道したに初まり、後者は誤つた愛國心の爲に公平を失し侵略主義に墮したものであることを歴史的に説明して居る。

研究發表は古代史に關するものは全く無く、中世の初期に關するものも甚だ少い、近世殊に世界大戰關係のものゝ多いことはいふまでもない。其の主なるものを舉げると、

ケルト及ゲルマン種族に及ぼせる傳道の影響

Prof. H. M. Stuckert (Ohio)

印刷の智識が如何にして支那より西方に傳はりしか

Mr. T. F. Carter (Columbia)

巫術の罪惡に就きて

Prof. G. L. Burr (Cornell)

ソヴィエットロシアの一史學家に與へたる印象

Prof. F. A. Golder (Stanford)

三國同盟と三國協商(一九〇二—一九一四)

Prof. B. E. Schmitt (W. Reserve Univ.)

歐羅巴の發展とモンロー主義

Prof. Ch. E. Chapman (California)

十九世紀に於ける極東傳道の影響

Mr. T. Dennett (Washington)

終りに次回の大會はリッツモンドに舉行のこゝを決しブルツセルに於ける國際史學委員會の要求に應じて本協會より派遣する委員の人選が行はれ、また我東京帝國大學圖書館の震災の報告があつて協會は其の出版にかゝる圖書を出来るだけ多數贈與することを議決し、そして前大統領ウイルソン氏を本協會の會長に舉げた。

ウイルソン氏の長逝 氏の政界に於ける名聲は茲に多

言を要しないが、歴史家としても特筆に價する。氏は多年アメリカ史學協會の會員として其の事業に參與し前記の如く新に會長の任に就いたが不幸にして今春二月三日宿痾癒えず溘焉として易逝した。氏の歴史に關する最初の

著作は Division and Remon 1829-1889 (1893)であつて二叢

書中の一小冊子に過ぎないが當時の青年學生に及ぼした感化は如何なる歴史教科書にも劣らぬ。何となれば南北戦争及それに續いた抗争の兩派に對して公平にして合理的な評論を試みた最初のものだからである。其の外、

George Washington (1896) は文辭壯重にして典麗偉人傳記の範例であり、History of American People (1902) は新奇な獨創的卓見は求むることを得ないが、立論の公平にして叙述の巧妙なる他の追隨を許さない。氏はアメリカ史、英國近世史を初めとして一般に史學の造詣深く、政治家としての識見遙に時流を抜いた所以は、こゝにあると思ふ。國際聯盟に於ける氏の華々しかつた活動を追想し、索寞蕭條たる晩年に想到すれば轉哀悼の情に堪へぬ。

歐洲史界雜俎

オックスフォード大學の學外講演委員會は七月二十八日から四週間に亘る夏期講演會を開くことに決議した、講演會の經過はまだ報導に接しないが講師は近世史關係の人多く、題目は中世の經編史、教會史、及當時の政治

學說に關するものが多いやうである。

English Histor. Review は今年から毎年七月號に前年の定期刊行物中史學に關するものゝ題目及内容を目錄にして附するものになつたといふ。

ケンブリッジ大學の史學科では機關雜誌として Cambridge Historical Journal を發行するものに決し多分年一回の豫定の由。敢て English Historical Review と競争するものでないことがあるが、それだけ編輯關係者の意氣込が察せられる。初號に見えた論文のうち主なるものは Mr. C. W. Previté-Orton, A General Survey of Recent Work in Italian Medieval History; Dr. G. P. Gooch, An Account of Hannu U. Hattstein of German Foreign Office; Prof. Hury, A Last Caesarea in Roman Britain; Sir Earnest Sclow, Peace-making, Old and New. 等である。

John Morley 氏は昨年九月二十三日、八十六歳の高齢を以て長逝し、純粹な英國議會政治家の最後の代表者を失つたと同時に、歴史著述家としても哀惜の情に堪へぬ氏は早くから記者として、Fortnightly Review の編輯者として

て、また歴史著述家として名を成したが、殊にヴォルテール、ルソー、デデロー等の研究に於て名聲を博した。

一八八六、グラッドストーンの下に愛蘭大臣として入閣したが爾來氏はグラッドストンの感化を享け生涯その自治法案を固持し最近の愛蘭問題の経緯に就いては不満を抱いて居つたといふ。氏の歴史著作にしては *Life of W. E. Gladstone, 3 vols. 1903* が最有名であつてグラッドストーンに親炙せる關係上、資料の豊富なる叙述の適切なる當にグラッドストーン傳としてばかりではな、其の時代史として傑出して居るものは世既に定評がある。其他、*Edm. Burke (1867 & 1876) Life of Rich. Cobden (1903, Walpole (1889) Cornwall (1900)* 等の著述があり、全集は一八八六以降出版されて十卷に及んで居る。

獨逸では Prof. Albert Wernickehoff 氏病革つて二月二日遂に逝去した。氏は法制史、教會史の造詣深く、彼の *Monumenta Germaniae historica* の編纂に參與し、其の *Capitula* 第二卷及カロリング時代の宗教會議文書の出版は氏の力によるものが多い。殊に *Concilia aevi Karolini*

t. 1 (1904/8) は七四三—八四二百年間に關するもので氏の努力の所産にしてはねばならぬ。氏の著者として *Gesch. d. deutschen Kirchenverfassung im Mittelalter (1913) National- u. d. deutschen Bestrebungen im Mittelalter (1910) Weltkrieg, papstliche und römische Frage (1918) Die deutsch. Reichskriegssteuer-gesetze von 1422-1497. u. die Deutsche Kirche (1916)* 等がある。

新刊書數種

The Social Origins of Christianity

by S. J. Case, Prof. of Early Church History Chicago

著者は曾て *Evolution of Early Christianity* を出し初期基督教徒の運動に決定的影響を興へた宗教的、哲學的環境に就いて論じて居るが、本書では彼等が基督教に歸依するに當り其の動機になつた社會上經驗、宗教上問題を擧げ是基督教は地方的禮拜や東方の神祕教に依てよりも寧ろ社會の要求に依て變化を受けたものと解せんし此點に於て著者は新見地にあるものと稱する。で彼は先未分化せぬものと想定さるゝ新約によつて基督教の本質を説明せんとする從來の方法に對し、基督教に關聯する文

學を文獻的歴史的に取り扱ふ方法を取り之を The History of ancient Christianity in Acorns of an evolving social experience in the realm of religious interests on the part of the people who constituted the new movement を説明する企てについて居る。

要するに彼は羅馬帝國時代の一市民の基督教に對する要求及其の要求が満足さる爲に表はるべき變化を發見せんとするにある。しかしこのことは何故に羅馬帝國が地方的、多神教的信仰から一神教的、世界的信仰に轉じたかの問題と密接の關係があり、著者の新方法必ずしも新奇とはいはれぬが、近時流行の所謂 Social History の一反映とも見るべく、この意味に於て一讀すべきものと思はれる。

The Dutch Alliance and the War against French Trade

1688-1697. by G. N. Clark

本書はマンチェスター大學の歴史叢書第四十二卷として出版されたもので其の大半は會て Engl. Histor. Review や *Manners Mirror* で發表されてゐる。著者は英國や和蘭の史料によつて新史實を提供して居るばかりでなく他の

時代に起つた類似の事件と比較論究して居るから政治史・經濟史及國際法研究者に於て興味ある著作と信する。

第一章ではウィリアム王の戰爭中、英、蘭二國が協力して佛商業を破壊せんといふ從來の説を駁し、當時の英、蘭二國は未だ政治上經濟上の計劃に導かれて政策を決する境遇にあらず、時としては政治上利益と商業上利益と相容れざる事すらあつたを論じて居る。第二章は一六八九年英、蘭二國の間に締結された四條約を述べ、其のうちの最重要なるもの即交戰國も中立國も佛國との通商を禁止し實際上中立を不可能ならしめた條約を論じて居る。第三章は最興味を惹く、即英、蘭の巡邏船(掠奪公許の私有船)でこのものは佛國商業に打撃を加ふる主要の武器であつたが、同時に英、蘭二國政府も意のままに管理することが出来ぬ、就中ジールランドの巡邏船は掠奪を唯一の目的とする觀があつて英、蘭二國政府よりいへば痛し痒しの體である。第四章は上述の禁令行はれず殊に中立國、スエーデン、デンマーク等佛國に接近する傾向を見るに至つた所以を述べ、最後の章に於て佛

國の對中立國政策及佛國巡邏船に關する記述があり、次に結論として戰爭の結果を論じ英、蘭二國の佛國商業に對する打撃は全く失敗に終りたることを經濟上の見地から評論して居る。

A History of Magic and Experimental
Science during the First thirteen centuries
of our Era. 2 vols by I. Thomdike

著者は先文學の研究から著手して居る。寧ろ *An Introduction to the Literature of Magic* といつた方が適切である。

かやうな問題に關する文献は祕書として祕藏され、之を採し出すばかりでも容易でない。だから此種の研究は實に難事業といはねばならぬ。本書には兩卷共に解題的目錄があつて魔法に關する書名、寫本名並に原寫本の所在を明にして居る。之等の史料は其數數百に達し全歐羅巴の諸方から採められたものらしい。著者は有史以前—エジプト、アツシリア等から魔法に關係深き發掘物あり—は勿論、東方のものには一瞥を與へただけで *ply* 以前には溯らず、中世以後を主眼とし、また魔法といつて

も神秘的な術、學問、迷信、習慣を斷つて居つて施術即ち *Society* には言及して居ない。要するに著者は魔法と實驗科學の歴史的發展及之と基督教思想との關係を闡明せんとし *ply* から *Cecco d'Ascoli* にいたる魔法家として有名なる者及實驗科學に貢獻せる人々の生涯、著書並に教旨を記載してゐる。其の努力は誠に多きべきであるが、憾むらくは魔法と實驗科學の關係を明にせず、兩者は相伴つて發展し兩者の歴史は同時に研究せらるべきを可きすこ簡單に片附けて居るがこの點に於て尙研究の餘地はありはしまいか。現にエジプト、ギリシア、ローマの魔法に關する著書も現はれ、異つた見解の史家 (*Hopfer*) もないではない。こにかくこの方面の研究者開拓者としての名譽は永く著者に捧げられねばならぬと思ふ。

Die Kulturwerte der Deutschen Literatur
in ihrer Geschichtlichen Entwicklung
2 Band. Von der Reformation bis zur Aufklärung
Von Iuno Francke

本書は文學上の作品の研究に基づいてルーテルからンツシングにいたる獨逸民族の悲惨な時代を構成した道徳

的、政治的、社會的状態の由來、變遷を叙述したもので未會有の慘狀が現れ、展開して來るを見る間に、何時しか荒蕪した冬枯の野面から若草の萌える趣きがあつて興味がつきぬ。著者或は獨逸の現狀に痛歎し、將來の獨逸に望をかけて其の類例をこゝに求めたものではあるまいか。十五世紀にあつてはエネアンルヴィオをして驚歎稱揚せしめた獨逸が一世紀半を過ぎるに宗教上、經濟上、智力上全く解體して教派間の抗争政治上の分裂は智力的にも社會的にも再び收拾すべからざる混亂に導き、更に三十年戰役以後にいたつてはまた言ふに及びぬ。次で君主專制の時代となり、産業は萎靡して振はず、智的生活の活動は思ひもよらぬ。宮廷文學は國粹を棄て、劇といはず抒情詩、小説といはず唯技巧の末に走り、外國の模倣に墮し強き國民的意識に根ざした獨創力を缺く。しかしこの暗澹たる時代に於ても獨逸民族の強靱なる特質は失はれず、文藝學術の士相次いで現はれ、ハンス、ザツクスを初めとしてフィンアルト、ケブレル、ドリムハウゼンの如き、ベーメの如き、敬虔派の如き、或はバッハ、

ライブニッツの如き、更にクロツプストツク、ウイラーンドの如き、レッシングの如きを出すに至つた。この奇蹟的變化を叙するに行文暢達、明快、再讀、三讀する値ありと思はれる。(以上菅原)

會報

●正 誤

本誌前號四四頁一行の「鎌倉時代の服飾變化とその社會的背景」(上)(上)を削る

同一〇八頁一行の「雜纂」を九六頁十行目に移す。

●寄贈交換圖書

シーボルト先生渡來百年紀念論文集	長崎市同紀念會
宋末の提舉船西域人蒲壽庚の事蹟	桑原 隲 藏
石川縣史蹟名勝調査報告 第二冊	石 川 縣
史學雜誌 三五の四・五・六・七	史 學 會
商業と經濟 第五年第一冊	長崎高商研究館
朝鮮史講座 一一	朝鮮史學會

史學 三の二

三田史學會

(右紹介者 石山乾二)

歴史地理 四四の一・二

日本學術普及會

退會

經濟論叢 一九の一

京大經濟學會

末松吉次

東洋學報 一四の一

東洋協會學術調查部

死 亡

佛教研究 五の一・二

大谷大學佛教研究會

觀想 七

東洋大學

栢原昌三 西村時彦

伊豫史談 三六三七

伊豫史談會

Young po (通報) VOL. XXII. 4. 5 XXIII. 1. Paul Pellier

●會 員 動 靜

●入 會

大阪市北區北梅田町四四五

山根德太郎

(右紹介者 島田貞彦)

大阪府泉北郡高石町

山川七左衛門

(右紹介者 三浦周行)

東京市外瀧之川町中里二七七

中村榮孝

東京市下谷區池ノ端七軒町三〇忍館方

坂本太邱

(右紹介者 植村清二)

東京市外瀧野川町西ヶ原五四三

杉 勇